

輪郭が、息を吹き返したように縁取られてい	意識はしていない。状態だった宿泊者たちの	本物の人形のように。存在は認識しているが	した。仏蘭という自立した人形の陰に隠れ、	る鴨ぱちと熊ぱちを掌で申し訳なさそうに指	凧は忘れ去られていたようにそこに置いてあ	人も一緒につて。。。	「いえ、あの・仏蘭さんが、そちらのお二	「どうしたんだい？」	と巡らせた。	に気づいた番才は、ゆっくりと目線を女将へ	女将には凧のことが見えていたはずだとすぐ	（まさか。今の会話を聞かれていた？）	一度胸が大きく隆起した。	振り返った。そしてそこに立つ凧の姿にもう	才は、突然の訪問者の声に驚き急いで後ろを	整理できない感情の行く末を思案していた番	「あつ、あのー。」		不思議な興味
----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	------------	---------------------	------------	--------	----------------------	----------------------	--------------------	--------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------	--	--------

く。	「ああそうかい。連れて行っておやりよ。	この子たちも話したいことがあるだろう。」	何事もなかったように雫に話しかける女将の	姿に、番才は自分が瞬時に考えた様々なこと	をもう一度考え直す。	「あつ、はい！では、その、しつ、失礼いた	します。」	縫い付けられた目に感情が宿るはずもなく、	鴨ぱちと熊ぱちは軽々と雫に抱き抱えられて	しまう。	「自分のことしか考えていないようできて	あの子なりに気を使ってくれたんだねえ。」	「えつと・・・、そつ、そうです・・・ね。」	雫の言葉の歯切れの悪さが気になった番才は	女将から雫へと視線を動かす。しかし雫はそ	のまま誰とも目を合わせることなく、小走り	で来た道に戻っていった。	「驚きました。雨ノさんに話を聞かれてし	まったのではと。」
----	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	------------	----------------------	-------	----------------------	----------------------	------	---------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------	---------------------	-----------

「盗み聞きしてるみたいでなんか・・・う	と熊ぱちを迎えにいった。	くし立てる仏蘭の勢いに押され、雫は鴨ぱち	腕の中であれやこれやこの行為の正当性をま	話を聞いてるはずよ！」	あの二人も連れて来なさいよ。きつとなんか	「あの三人なんか怪しいわね・・そうだ雫！	る手に力を込める。」	庭の階段を駆け下りながら、雫は人形を抱え	（本当にこんなことして大丈夫なのかな。）	かった。	に座る漠空に聞きたい衝動が溢れて止まらな	何か受け取ることができましたか？」と、隣	釈然としない一連の出来事に、（すいません	線を向ける。わかるようで何もわからない。	女将のその微笑みに、番才は再度入口へと視	実だからねえ。」	れはそれで別に構わないよ。紅蘭の意思は事	「ひっひっひっ。聞かれてしまったのならそ
---------------------	--------------	----------------------	----------------------	-------------	----------------------	----------------------	------------	----------------------	----------------------	------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------	----------------------	----------------------

そ	それ	は	ま	る	で	仏	蘭	が	元	の	人	形	へ	と	戻	っ	て	い	い	つ
労	いの	言	葉	に	も	ま	る	で	想	い	が	こ	も	っ	て	い	な	い		
「	あ	り	が	と	ね	え	。」													
「	え	っ	と	・	・	・	あ	の	・	・	。」									
ま	ま	の	張	り	が	な	い	。												
立	っ	て	出	迎	え	た	仏	蘭	の	口	調	に	は	、	つ	い	先	ほ	ど	
「	あ	っ	、	雫	お	か	え	り	。」											
気	に	雫	は	す	ぐ	に	気	づ	い	た	。									
走	っ	て	少	し	乱	れ	た	呼	吸	を	整	え	な	が	ら	側	ま	で	寄	
「	お	待	た	せ	し	ま	し	た	。」											
は	揃	っ	て	座	っ	て	い	た	。											
な	屋	根	の	下	の	椅	子	へ	と	近	づ	く	と	、	仏	蘭	と	紅	蘭	
ま	と	ま	ら	な	い	思	考	も	一	緒	に	抱	え	た	ま	ま	大	き		
と	う	と	う	迷	い	は	音	に	な	っ	た	。								
「	う	ー	ん	。」																
こ	と	も	で	き	る	。														
き	な	い	。	仏	蘭	に	言	わ	れ	て	と	い	う	理	由	に	甘	え	る	
そ	れ	で	も	確	か	に	気	に	な	っ	て	い	る	自	分	を	無	視	で	
ん	、	う	ー	ん	。」															

後	う	不	に	る	て	存	と	問		（	る	そ	「	ば	場	「		す	て
う	や	貞	も	の	こ	在	も	し	「	・	よ	う	こ	ち	に	そ	あ	。	い
ま	っ	腐	言	に	に	が	す	て	せ	・	う	の	の	と	そ	の			る
く	て	れ	わ	さ	こ	こ	ん	い	っ	・	な	な	子	な	ぐ	が			よ
立	瞬	た	な	、	の	ん	な	い	か	か	に	に	も	ん	わ	聞			う
ち	時	ん	い	こ	子	な	に	の	く	わ	側	な	う	ん	ぬ	い			で
回	に	だ	の	の	も	に	に	よ	興	い	い	な	な	ん	突	て			、
れ	ど	け	！	こ	う	に	に	つ	味	の	の	が	ん	に	然	よ			雫
る	っ	ど	そ	の	な	に	に	て	津	よ	つ	ら	に	も	の	雫			の
か	ち	も	れ	子	ー	に	に	あ	々	さ	言	緊	も	話	大			呼	
判	の	！	で	も	ん	に	に	げ	話	。	っ	張	う	し	き			吸	
断	味	さ	も	う	に	に	に	た	し	そ	る	す	か	け	な			は	
で	方	す	う	い	も	に	に	の	に	り	わ	る	て	あ	ん			静	
き	に	が	い	わ	。	に	に	に	ん	ゃ	よ	ね	あ	げ	な			か	
る	つ	雫	わ	っ	ん	に	に	う	な	あ	ね	っ	て	さ	ー			に	
の	い	ね	て	さ	ん	に	に	ん	ん	憧	っ	て	さ	、	ん			ま	
は	と	え	、	、	ん	に	に	で	で	れ	っ	、	、	、	ん			た	
才	け	。			ん	に	に	し	質	の	っ	う	ん	、	ん			れ	
能	ば				ん	に	に	ま	。	。	っ	ん	ん	、	ん			だ	
よ	今	そ			ん	に	に	っ			っ	ん	ん	、	ん				

ん。	大切にしなさい！」	「えっ！？うわっ、あっ、はい。」	雫は舞台役者のように身振り手振りを交えて	話す仏蘭の勢いにとりあえず返事をし、それ	から一点を見つめたまま静かに座る紅蘭へと	視線を移した。	この不思議な世界にいても違和感のないそ	の謎めいた魅惑的な佇まいに目を奪われる。	右耳にかけた肩につく髪の毛も光を反射し光	沢があり、そこから覗く赤子のような肌に衝	動的に触れたくなってしまう。	（とても綺麗・・。）	耳では尚もなにかを喋っている仏蘭の声の振	動を感じてはいるが、視覚から受け取る圧倒	的な情報に掻き消されていた。	強めに吹いた風で紅蘭の前髪が揺られ、雫	が長いまつ毛を注視している、不意に瞳が	動きそのまま避ける間もなく紅蘭と目が合っ	てしまった。	（あっ。）
----	-----------	------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------	------------	----------------------	----------------------	----------------	---------------------	---------------------	----------------------	--------	-------

受	ゆ	話	「	仏	選	答		唇	「	を	冷	前	「	ほ	全	風		全	と
け	っ	し	あ	蘭	択	え		を	え	音	静	髪	え	ど	て	が	身	全	お
止	く	て	ん	が	肢	な		噛	つ	に	な	の	っ	落	を	止	に	手	本
め	り	か	た	話	に	く		み	と	す	頭	奥	！	ち	諦	み	視	の	の
、	と	ら	。そ	を	手	て		雫	と	る	は	の	？	着	め	空	線	よ	う
仏	向	よ	う	進	を	は		は	待	勇	下	目	い	い	た	気	を	う	な
蘭	け	。	い	め	伸	を		を	ち	気	を	が	え	た	よ	が	巡	な	動
は	ら		う	た	ば	話		向	な	ま	向	泳	の	っ	う	止	ら	揺	を
一	れ		こ	。	そ	が		い	さ	進	い	ぎ	。	。	な	ま	せ	を	示
歩	る		と		う	進		！	い	ま	と	身	。		悲	っ	静	す	と
前	紅		は		と	ま		」	。	な	、	体			壯	か	に	、	紅
に	蘭		ま		し	い				い	、	が			感	口	を	、	蘭
踏	の		ず		か	と				て	、	縮			を	開	。	。	は
み	視		自		け	こ				く	そ	こ			は	い			雫
出	線		分		た	ろ				れ	れ	ま			ら	。			の
し	を		の		と	。				な	が	。			ん				。
て	正		こ		こ					い	、	至			だ				。
続	面		と		。					。	そ	っ			、				。
け	か		を		で						れ	。			怖				。
る	ら				、						。				い				。

だ	は	生	辛	「	な	元	い		く	心	今	用	い	「	織	由	ん	し	
か	あ	き	気	ま	ど	の	よ	「	末	の	ま	し	こ	ん	織	な	ん	し	
ら	あ	ら	臭	っ	も	口	！	そ	を	中	で	な	と	に	細	ん	て	と	
あ	だ	れ	い	た	の	調	それ	れ	案	で	は	だ	け	も	な	て	て	い	
ん	言	て	顔	く	と	に	に	！	じ	安	違	け	聞	話	な	よ	よ	て	
た	っ	る	し	ど	も	戻	！	ま	た	堵	う	こ	な	話	よ	み	あ	い	
も	た	ん	て	い	と	つ	ま	ず	た	し	静	う	う	だ	。わ	ん	る	て	
、	と	だ	た	つ	も	た	ず	は	仏	は	か	な	ん	わ	た	な	話	は	
せ	こ	か	ま	も	こ	仏	は	わ	蘭	、	っ	ん	て	し	し	れ	だ	は	
っ	ろ	ら	ん	こ	い	は	、	た	は	、	た	て	そ	が	ぞ	ぞ	わ	曖	
か	で	！	な	つ	つ	、	質	た	の	怒	く	ん	ん	あ	れ	違	。ま	昧	
く	な	自	い	も	も	場	問	行	の	る	せ	な	虫	れ	だ	う	し	は	
そ	に	分	わ	！	い	の	に	く	場	仏	に	な	が	け	け	だ	ろ	し	
ん	が	は	わ	み	つ	場	答	末	の	蘭	い	虫	い	聞	聞	う	か	か	
な	変	こ	た	ん	も	の	え	案	霧	を	い	が	い	い	け	け	答	え	
綺	わ	う	い	な	。。	行	な	じ	困	見	か	い	話	聞	ど	え	え	な	
麗	る	だ	い	揃		く	さ	た	気	て	ら	通	き	一	な	い	い		
で	の	あ	い	っ		末	さ	な	の	、	ね			番	な	な	な		
か	よ	の	い	て					行	雫	。								
わ	。	人	い	て						は									

「えっ！？ああ・・・そうね。こんなお子	に差し出す。	急いでいたから雑に二体の人形を掴み仏蘭	来ましたよ。」	「あああのっ、仏蘭さん！お二人を連れて	た。	服を翻し、間に割って入って仏蘭に声をかけ	ような気がした雫は、自分の着ている白い衣	赤い着物がそのまま紅蘭の感情を表している	もキユートで素敵よん。」	「あーらなにか癪に障ったかしら？怒った顔	なく、さらに一步踏み出し対峙する。	もちろん仏蘭がこの程度で引き下がるわけが	「なによ。急に怖い顔して。」	のがわかる。	りが宿り、はたから見ても仏蘭を睨んでいる	いた雰囲気が変わった。穏やかだった瞳に怒	仏蘭がそれを言い切ると、突然紅蘭が纏って	いいわよ。」	いい顔持ってたんだから、もっと笑ったほうが
---------------------	--------	---------------------	---------	---------------------	----	----------------------	----------------------	----------------------	--------------	----------------------	-------------------	----------------------	----------------	--------	----------------------	----------------------	----------------------	--------	-----------------------

聞	て	ど	「	し	レ		そ	じ	蘭	往	の	仏	白		苦	敵	味	「	や
い	いた	う	ね	な	ス	パ	の	り	を	復	奥	蘭	い	さ	笑	に	方	あ	ま
た	。 栗	して	え	が	の	ツ	肩	じ	見	す	に	は	こ	ー	い	な	に	あ	と
。	は、	い	。	ら	人	チ	に	り	つ	。	も	鴨	と	て	を	と	な	。	と
	自	い		、	形	ワ	手	と	め	。	た	ぱ	と	な	浮	心	。	。	。
	分	い		何	は	ー	を	熊	、	縫	れ	ち	熊	か	か	底	。	。	。
	に	い		か	、	ク	添	ぱ	「	い	さ	を	ぱ	な	っ	末	。	。	。
	向	い		を	相	の	え	ち	ぬ	付	。	を	ち	が	た	恐	。	。	。
	け	い		聞	手	人	。	に	ふ	け	。	を	を	ら	っ	ろ	。	。	。
	ら	い		き	を	形		近	ふ	ら	。	背	を	た	た	し	。	。	。
	れ	い		出	諭	と		づ	と	れ	。	も	た	。	い	。	。	。	。
	た	い		し	す	会		い	。	い	。	た	れ	。	存	。	。	。	。
	弱	い		て	よ	話		た	。	る	。	の	。	。	在	。	。	。	。
	々	い		い	う	を		仏	。	だ	。	。	。	。	だ	。	。	。	。
	し	。		。	な	始		蘭	。	け	。	。	。	。	な	。	。	。	。
	い				こ	め		は	。	の	。	。	。	。	と	。	。	。	。
	声				と	た		怪	。	目	。	。	。	。	、	。	。	。	。
	を				口	。		し	。	は	。	。	。	。	。	。	。	。	。
					に			く	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
								笑	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
								う	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
									。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。

